

理学療法の実践場面で、「対象者のボディイメージがよくない」と言われることがあります。脳損傷の場合には、重力への適応不全、身体知覚に対する自己認識の歪みなどを表現する用語として使われていますが、文字通りそのイメージは伝わるもののメカニズムや正確な重症度を問われると曖昧な部分が少なくありません。

他方、ボディイメージという用語は、精神科領域、看護学領域、体育学の領域などでも使われています。本特集では、この用語のもつ意味について神経科学および現象の両側面から広く検証し、理学療法の発展に寄与しようとする狙いをもっています。

■理学療法とボディイメージ(小澤佑介論文)

ボディイメージは私達が環境の中で行動する上で重要な役割を果たしている。ボディイメージを基盤として空間的な自己の定位や道具の使用、行為の予測などを行っている。ボディイメージの形成、変容には視覚系、前庭系、固有感覚系の感覚機構を基盤とした能動的な行為-情報の循環が重要である。理学療法領域におけるボディイメージの障害とは「対象者のボディイメージと現実のボディとの相違」が主要な問題といえる。この障害は平衡機能や運動学習などと関連して捉えられる。ボディイメージの障害は運動麻痺や感覚障害などと同様に障害構造の1つとして捉えられ、理学療法領域におけるボディイメージの臨床的な評価指標と治療戦略が重要である。

■脳とボディイメージ(泰羅雅登論文)

脳内には何種類かの身体再現があると考えられている。古くから頭頂連合野は身体再現に関わるとされてきたが、特に運動との関連において、身体再現がなされている。本稿では頭頂連合野での身体再現について、その神経基盤を概説する。

■空間識とボディイメージ(高橋正紘論文)

空間の主のように振舞える理由、時に空間の奴隷のように平衡破綻が起こる理由を、実験的動揺病の結果を元に解説した。脳は耳石から3次元空間Z軸を、視覚から空間静止情報を、前庭器から慣性入力を得て、外界座標を再現し、身体座標に画一的に変換している。視覚と前庭は単純な原理でベクトル統合する。これら感覚統合と姿勢制御の概念図を示した。本仮説は微小重力実験結果や神経科学知見からも支持される。

■運動とボディイメージ(橋本公雄、他論文)

運動・スポーツ活動への継続参加は身体的側面の発達を促し、ボディイメージを変容させる可能性がある。そこで本稿では、運動・スポーツ心理学の研究領域におけるボディイメージの知覚的、認知的、感情的、そして行動的な4つの概念とその評価法について解説し、運動・スポーツによるボディイメージの変容メカニズムと健康者や障害者を対象にしたボディイメージの改善・向上に関する研究成果を概観した。

■看護とボディイメージ(前川厚子論文)

ボディイメージは自分の身体に関連する知覚と経験によって形成され、刺激との相互作用のなかで常に修正されていく動的な概念である。それは、ライフステージの諸段階で自分自身の特有な体験に基づき、感覚・感性に届く内的、外的刺激とその反応から脳裏に焼き付けられ、変換される自己の鏡像である。

ボディイメージの変化をもたらす要因はがんによる臓器の摘出や切除、四肢の切断、神経難病や脳血管系の疾患、摂食障害や統合失調症など様々であり、その対処と介入法も開発されてきているが、特に患者自身が感情面の整理をしながら肯定的なボディイメージに向かえるように配慮する必要がある。